

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごしよ

上野殿御書

ぎおんしょうじや こと

（祇園精舎の事）

新版
1846
ゝ
1847

うえのどのごしよ ぎおんしょうじや こと

上野殿御書（祇園精舎の事）

けんじがんねん

がつ にち

さい

なんじょうときみつ

建治元年（75）

8月18日

54歳

南条時光

おんつか

あ

がた

そうろう

やかたづく

わざと御使い有り難く候。それについては、屋形造り

よし

そうら

まい

そうら

わたましもう

そうら

の由、めでたくこそ候え。いつか参り候いて、移徙申し候

わばや。

いち

むなふだ

うけたまわ

そうろう

か

そうら

ほうきこう

一、棟札のこと、承り候。書き候いて、この伯耆公

まい

そうろう

に進らせ候。

きようもん

すだつちようじや

ぎおんしょうじや

つく

この経文は、須達長者、祇園精舎を造りき。しかるに、

いんねん

すだつちようじや

しちど

かさい

遭

いかなる因縁にやよりけん、須達長者、七度まで火災にあ

そろろうとき

ちようじゃ

よし

ほとけ

と

たてまつ

い候時、長者この由を仏に問い奉る。

ほとけ

こた

のたま

なんじ

けんぞく

とんよくふか

ゆえ

かさい

仏、答えて曰わく「汝が眷属、貪欲深き故に、この火災

なんお

の難起こるなり」。

ちようじゃもう

かさい

なん

防

もう

長者申さく「さて、いかんしてこの火災の難をふせぎ申

すべきや」。

ほとけ

宣

たつみ

かた

ずいそう

なんじ

しようじん

仏のたまわく「辰巳の方より瑞相あるべし。汝、精進

か

かた

む

かなた

ひかり差

きじんさんにんきた

して彼の方に向かえ。彼方より光ささば、鬼神三人来つて

い

なんかい

とり

めいふん

な

とり

じゅうしよ

云わん、『南海に鳥あり。鳴忿と名づく。この鳥の住処に

かさい

とり

ひと

もん

とな

もん

い

火災なし。またこの鳥、一つの文を唱うべし。その文に云わ

しょうじゅてんちゆうてん

かりようびんが

みこえ

しゅじよう

あいみん

く、聖主天中天、迦陵頻伽の声もて衆生を哀愍したも

もの

われ

いまきようらい

うんぬん

もん

とな

かなら

う者を、我らは今敬礼す云々。この文を唱えんには、必ず

さんじゅうまんり

うち

かさい起

さんにん

きじん

三十万里が内には火災おこらじ』と。この三人の鬼神、か

っ

うんぬん

すだつ

ほとけ

おお

くのごとく告ぐべきなり」云々。須達、仏の仰せのごとく

すこ

違

そうら

のち

かさい

み

せしかば、少しもちがわず候いき。その後、火災なきと見

そうろう

えて候。

めつごまつだい

至

きようもん

か

これによって、滅後末代にいたるまで、この経文を書い

かさい

止

そうろう

いま

そうろう

て火災をやめ候。今、もってかくのごとくなるべく候。

かえ

がえ

しん

たも

きようもん

ほけきよう

だいさん

まき

返す返す信じ給うべき経文なり。これは法華経の第三の卷

けじようゆほん と

そうろう

くわ

ごぼう

もう

ふく

の化城喩品に説かれて候。委しくはこの御房に申し含め

そうろう きようきようきんげん

て候。恐々謹言。

はちがつじゅうはちにち

八月十八日

にちれん

日蓮

かおう

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事